

# 帝紀とフルコト —『古事記』序文読解の試み—

下 鶴 隆

## はじめに

二〇一二年は『古事記』撰録一三〇〇年にあたり、数々の出版やイベントに人々の話題はつきない年となった。その一方で日本古代史研究、なかんずく令前史研究の現状は、多くの課題を抱えたままである。

近年、積極的に律令制以前の国家や社会に切りこもうとする勇気ある前向きな研究も確かにあらわれてきてはいるが、必ずしも明確な像を共有するレベルにまでは至っていない。<sup>①</sup>

このような状況がおこってくる原因のひとつには、大化改新の評価という大きな壁があることも確かであるが、より根源的な原因をあげるとすれば、根本史料たる『古事記』・『日本書紀』の史料性格が、未だ不明瞭であることである。このため、両書の筆録編纂事情、構成、流布受容のあり方等どれ一つをとっても、未だその相違が十分理解できていない状況にある。結果として、記紀の本文批判の上に、その内容を相対化する動きも進まず、令前史研究の進展を阻んでいるといっ

てよい。

そのことは、記紀の性格を端的に語っているはずの『古事記』序文すら、今ひとつ合理的な解釈のもとに読解できていないという現状にあらわれている。序文の読解といっても、問題となっているのは、後でも採りあげるとき、その撰録経緯を語ったわずかな部分なのであるが、これが古代史研究の大きな壁になっていることは否めない。もちろん、これまで多くの研究者が、この課題をのりこえようと努力してきたことはいうまでもないが、『古事記』序文の読解というテーマは、近年、意図的に避けられるか、放棄されつつあり、日本文学研究の領域では「作品」論などといった研究潮流を生みだすに至っている。<sup>②</sup> 記紀をそれぞれ一つの体系ある「作品」として読みこみ解釈してゆくというこの研究潮流は、記紀から令前の国家社会を探るといふ歴史学的なアプローチを否定する動きを含んでおり、歴史学の立場からは容認できない研究傾向を示している。

こうした動きをのりこえ、科学的な方法にもとづいて記紀の本文批

表1 序文の通説的解釈にみる帝紀・旧辞の整理

天武詔		阿礼へ勅語	序文の地の文	元明詔
A 帝紀	C 帝紀	E 帝皇日繼	H 先紀	
諸家がもたらす	撰録	誦習する	謬錯を正すため	阿礼が誦習した ↓ I 勅語旧辞 (撰録献上) ↓ 『古事記』
B 本辞	D 旧辞	F 先代旧辞	G 旧辞	
諸家がもたらす	討覈	誦習する	誤作を惜むため	

判を進めるためには、実証的な史料批判と合理的な解釈にもとづいて、『古事記』序文の厳密な読解を行うことがぜひとも必要である。そしてそれを行うためには、序文読解の二つのキーワードであった先行史料「帝紀」・「旧辞」の史料的性格を避けて通ることができない<sup>③</sup>。これまで序文の読解を妨げていた最大の原因は、記紀に先行するこの二つの前提史料の性格が、今ひとつ不明瞭だったことにあるからである。

ただ『古事記』序文で言及されるこれらの史料は、絶対的な史料不足もあって、あまりその内実がわかっていない。宣長以来、津田左右吉をへて倉野憲司・武田祐吉にいたる通説的な理解は表1に整理したような序文の理解に基づいている<sup>④</sup>。序文中の「帝紀」や「旧辞」に関わる記述は、表1のA～Iの順序であらわれてくるのだが、通説では、「帝紀」についてA＝C＝E＝Hの関係でとらえ、「旧辞」についてはB＝D＝F＝Gの関係で位置づける。そして、これを基礎に「帝紀」を「帝皇日繼」に一視することで、「帝紀」を大王

家の系譜を中心とする先行史料と結論づける。つきに、これを前提として、「旧辞」(B＝D＝F＝G)の史料系列を「帝紀」以外の物語的要求の強い先行史料と整理する。最後に、この両系列が、I「勅語旧辞」に統合されて、元明朝の撰録献上に付されると考えるのである。

また、後でとりあげる欽明紀二年三月条の引く「帝王本紀」が、同条に記される王族系譜の原史料となっていることから、『古事記』序文の「帝紀」とはこの「帝王本紀」の略であり、こうした王族系譜の類を中心とする史料であるとする傾向も生まれてきた。

こうした理解の背景には、「帝王本紀」を皇族の歴史＝大王家の立場、則ち国家的な立場から記述された歴史であるとし、「帝紀」「帝王日繼」「帝王本紀」を漠然と同じようなものにとらえる意識がある<sup>⑤</sup>。

しかし、粕谷興紀が「帝紀」の中に物語的要素が含まれることを、国語学の手法に基づき実証的に論証したことから、こうした通説的な理解には大きな疑問が生じるようになった<sup>⑥</sup>。「古事記」や『日本書紀』の本文を通説的な意味での「帝紀」「旧辞」に腑分けしようとしても、現実として困難であることが、通説的理解に変更を迫る要因となった。

こうした中で、近年、仁藤敦史や矢嶋泉などは、「帝紀」＝系譜を中心とする先行史料、「旧辞」＝それ以外の物語的要素からなる先行史料といった教科書的理解を積極的に否定する発言を行っているが、それにかわる「帝紀」「旧辞」論を示すまでにはいたっていない<sup>⑦</sup>。

これまでの通説的理解は、天武詔、阿礼への勅語、序文の地の文、元明詔にいたる序文の構造を無視して、「帝紀」「旧辞」を二つの系

列にくくってしまった点に無理がある。特に、「帝紀」を「帝皇日繼」と同一視するこれまでの序文理解に大きな問題があったと考える。本稿では、「帝紀」＝「帝皇日繼」というこれまでの理解を否定した上で、あらためて『古事記』序文の読解を提起してみたいと考える。

そのために、まず、一・と二・では、欽明紀二年三月条の史料構造と引用のあり方を検討することで、「帝王本紀」の史料性格を明らかにしたいと思う。そしてそれをもとに「帝王本紀」と『古事記』序文の「帝紀」との関係に一定の理解をえ、さらに「帝王本紀」と「帝皇日繼」の関係についても、一定の理解を得ることをめざす。三・では、これまでの「旧辭」を「古事」や「古語」といった表現も含むフルコトとしてとらえ返し、その史料性格を口誦史料の観点からえがく。つぎに四・では、それまでの議論をふまえた上で、これまで不明とされてきた『古事記』序文の編纂経緯を示す部分について、一貫した内容のものとして合理的に読解を試みる。最後に五・では、以上を総括して『古事記』と『日本書紀』の本質理解にまで論を進めたい。

## 一 帝紀・帝王本紀の史料性格

### (1) 欽明二年三月紀の史料構造と「帝王本紀」

まず、「帝王本紀」を記述する欽明二年三月紀の記事全体の構造を検討し、その中に「帝王本紀」を位置づける作業を試みる。

史料一の全体構造は、a～γの三つの部分に区分することができ、その内容は以下に示すとおりである。

史料一 日本書紀 欽明二年三月条<sup>⑧</sup>

a

二年春三月、納<sup>ニ</sup>五妃<sup>一</sup>。元妃、皇后弟曰<sup>ニ</sup>稚綾姫皇女<sup>一</sup>。是生<sup>ニ</sup>石上皇子<sup>一</sup>。次有<sup>ニ</sup>皇后弟<sup>一</sup>。曰<sup>ニ</sup>影皇女<sup>一</sup>。<sup>⑨</sup>此曰<sup>ニ</sup>皇后弟<sup>一</sup>、明是<sup>ニ</sup>檜隈高田天皇女<sup>一</sup>。而列<sup>ニ</sup>后妃之名<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>母妃姓与<sup>ニ</sup>皇女名字<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>何書<sup>一</sup>。後勅者知之。是生<sup>ニ</sup>倉皇子<sup>一</sup>。

β

次蘇我大臣稻目宿禰女曰<sup>ニ</sup>堅塩媛<sup>一</sup>。<sup>⑩</sup>堅塩、此云<sup>ニ</sup>岐拖志<sup>一</sup>。生<sup>ニ</sup>三七男六女<sup>一</sup>。其一日<sup>ニ</sup>大兄皇子<sup>一</sup>、是為<sup>ニ</sup>橘豐日尊<sup>一</sup>。其二曰<sup>ニ</sup>磐隈皇女<sup>一</sup>。更名<sup>ニ</sup>夢皇女<sup>一</sup>。初侍<sup>ニ</sup>祀於伊勢大神<sup>一</sup>。後坐<sup>ニ</sup>麤皇子茨城<sup>一</sup>解。其三曰<sup>ニ</sup>臘嘴鳥皇子<sup>一</sup>、其四曰<sup>ニ</sup>豐御食炊屋姫尊<sup>一</sup>、其五曰<sup>ニ</sup>梔子皇子<sup>一</sup>、其六曰<sup>ニ</sup>大宅皇女<sup>一</sup>、其七曰<sup>ニ</sup>石上皇子<sup>一</sup>、其八曰<sup>ニ</sup>山背皇子<sup>一</sup>、其九曰<sup>ニ</sup>大伴皇女<sup>一</sup>、其十曰<sup>ニ</sup>桜井皇子<sup>一</sup>、其十一曰<sup>ニ</sup>肩野皇女<sup>一</sup>、其十二曰<sup>ニ</sup>橘本稚皇子<sup>一</sup>、其十三曰<sup>ニ</sup>舍人皇女<sup>一</sup>。次堅塩媛同母弟曰<sup>ニ</sup>小姉君<sup>一</sup>。生<sup>ニ</sup>四男一女<sup>一</sup>。其一日<sup>ニ</sup>茨城皇子<sup>一</sup>。其二曰<sup>ニ</sup>葛城皇子<sup>一</sup>、其三曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇女<sup>一</sup>、其四曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇子<sup>一</sup>、<sup>⑪</sup>更名<sup>ニ</sup>天香子皇子<sup>一</sup>。一書云、更名<sup>ニ</sup>住迹皇子<sup>一</sup>。其五曰<sup>ニ</sup>泊瀬部皇子<sup>一</sup>。<sup>⑫</sup>一書云、其一日<sup>ニ</sup>茨城皇子<sup>一</sup>、其二曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇女<sup>一</sup>、其三曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇子<sup>一</sup>、更名<sup>ニ</sup>住迹皇子<sup>一</sup>。其四曰<sup>ニ</sup>葛城皇子<sup>一</sup>、其五曰<sup>ニ</sup>泊瀬部皇子<sup>一</sup>。<sup>⑬</sup>一書云、其一日<sup>ニ</sup>茨城皇子<sup>一</sup>、其二曰<sup>ニ</sup>住迹皇子<sup>一</sup>、其三曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇女<sup>一</sup>、其四曰<sup>ニ</sup>渥部穴穗部皇子<sup>一</sup>、更名<sup>ニ</sup>天香子<sup>一</sup>。其五曰<sup>ニ</sup>泊瀬部皇子<sup>一</sup>。<sup>⑭</sup>帝王本紀、多有<sup>ニ</sup>古字<sup>一</sup>、撰集之人屢經<sup>ニ</sup>遷易<sup>一</sup>。後人習讀、以<sup>レ</sup>意刊改、伝写既多、遂致<sup>ニ</sup>舛雜<sup>一</sup>、前後失<sup>レ</sup>次、兄弟參差。今則考<sup>ニ</sup>覈古今<sup>一</sup>、歸<sup>ニ</sup>其真正<sup>一</sup>。一往難<sup>ニ</sup>識者<sup>一</sup>、且依<sup>レ</sup>一撰、而注<sup>ニ</sup>詳其異<sup>一</sup>。他皆効<sup>ニ</sup>此<sup>一</sup>。

γ

次春日日抓臣女曰<sup>ニ</sup>糠子<sup>一</sup>。生<sup>ニ</sup>春日山田皇女与<sup>ニ</sup>橘麻呂皇子<sup>一</sup>。

a 皇后弟 稚綾姫皇女・日影皇女とその所生皇子女

β 蘇我稲目の女 堅塩媛・小姉君とその所生皇子女

γ 春日日抓臣の女 糠子とその所生皇子女

「帝王本紀」を記述する日本書紀の本注①は、β部分にかけられている。そこでは、日本書紀本文βの前提となった二つの一書が挙げられたうえで、前提史料である「帝王本紀」が「以意刊改」され「伝写既多」く、「遂致舛雑」して王族系譜が混乱している状況が述べられる。そして、こうした状況を「考覈古今」、帰「其真正」したのが、本文βというわけである。もちろん「其真正」とは、「舛雑」をきたす前の「帝王本紀」と考えられ、この本文は「帝王本紀」諸本に依拠して書かれたものと考えられる。

いっぽうα部分には、本注②がかけられており、本文αの出典が「而列后妃之名。不見母妃姓与皇女名字、不知出何書」。後勘者「知之」とされており、少なくとも「帝王本紀」に依拠して本文αが書かれたものではないらしい。

本文γについては、一つも本注が附されていないものの、糠子については次の史料がある。

史料二 仁賢元年二月紀<sup>⑨</sup>

（前略）次和珥臣日爪女糠君娘生二女。是為春日山田皇女。一本云、和珥臣日触女大糠娘生二女。是為山田大娘皇女。更名赤見皇女。文雖稍異、其实一也。

則ち糠子は仁賢の後妃として春日山田皇女を生んだとする一本がある

ったわけである。しかもこれには別の一本があったらしく本注に引かれているが、その内容は「文雖稍異、其实一也」というものであった。史料二は本文、注ともに、史料一本文γに対する重要な異伝になっているにもかかわらず、史料一はもちろん、「帝王本紀」に関する言及をとまなわない。このことから、本文γもまた、「帝王本紀」に依拠して書かれたものではないと結論することができるといえる。

以上の考察から、あらためて欽明二年三月紀のかかえる問題点を整理してみよう。

① α、γは、欽明の後妃を掲げる同じ本文であるのに、「帝王本紀」に依拠して書かれたのは、本文βのみである。

② 本注①は、なぜ本文βにかけられ、本条全体の末尾である本文γのあとにつけられなかったのか。

③ しかも、本注①では、「一往難識者、且依一撰、而注詳其異」。他皆効此」とあり、「帝王本紀」諸本に依拠した本文考定の原則を、「他皆効此」として、あたかもここからこの原則を適用するように記述している。ということは、これ以前の后妃については、「帝王本紀」諸本に依拠した本文考定が為されていない可能性がある。

これらの問題点はなぜなのか、一挙に決することができる解はないものだろうか。

まず、①の問題点について考えてみよう。もし、「帝王本紀」にαやγに関する記述が存在していたのであれば、特別の事情のない限り、

a・γの本文考定に使用されたはずである。それがないのは、もともと、「帝王本紀」にそのような記述がなく、βの部分しか記述がなかったからではなからうか。考えてみれば、βの部分は蘇我氏出身の後妃とその所生皇子女に関する記述となっている。それも、ただの後妃ではなく、蘇我氏が初めて大王家に入れた后妃たちに関する記述であることに気づく。

こう考えると②と③の謎も解ける。もともとここであげられた「帝王本紀」とは、蘇我氏が出した后妃とその皇子女の記述に主眼のある史料であり、すべての大王とその后妃・皇子女を記述するような性質をもたないものであったのだ。よって、蘇我氏出身以外の后妃の記述に「帝王本紀」が使われることはなく、最初の蘇我氏出身后妃たる堅塩媛と小姉君の部分、すなわち本文βに対してのみ①のような本注がつけられねばならなかった。当然、本注④末尾にある「他皆効レ此」という記載の意味も、本条以降の蘇我氏関係后妃・王族の記載について、同じ原則であることを示していると考えられる。

## (2) 欽明二年三月紀所引注記と『漢書叙例』の比較対照

ところで、史料一β部分に付された問題の注記は、顔師古注の『漢書叙例』の部分を下敷きにして述作されていることが、津田左右吉以来、指摘されている<sup>10)</sup>。そこで、『漢書叙例』からの述作の態度を検討すること、で、「帝王本紀」の内容をかいま見ることとはできないか、検討を試みたい。まず、表2の欽明紀二年三月条と顔氏古注『漢書叙例』

の比較対照表を参照してもらいたい。<sup>11)</sup>

紙幅の関係もあり詳細な検討は省かざるをえないが、欽明紀が述作にあたって『漢書叙例』から特に改変しているポイントは、次の三点に整理することができる。

まず『漢書叙例』で、『漢書』の旧文が遷易しているとする部分を、「帝王本紀」では、「撰集之人」が遷易することとしていることである。つぎに本文の改変主体について、『漢書叙例』では、後代の人、末学膚受の人としての「後人」であるのに対し、「帝王本紀」では、しばしば遷易した「撰集之人」のうちの「後人」となっている。最後に、『漢書叙例』の後半にある「諸表列位」に関する記述を、前の部分に接合改変すること、で、「帝王本紀」は、異本間の変異内容を「前後失レ次・兄弟参差」と表現している。

以上の点から、「帝王本紀」について書紀の本注筆者が特に伝えたかった点は、①「帝王本紀」本文の形成について、「撰集之人」がしばしば遷易していること、②「帝王本紀」本文の改変について、遷易した後代の「撰集之人」が改変したこと、③「帝王本紀」異本間の変異内容については、系譜について「前後失レ次・兄弟参差」であること、の三点に集約できる。

これらのポイントをふまえば、「帝王本紀」本文の構成について、次のように推定することができよう。

まず、「撰集之人、屢経遷易。」という点から、複数の表記大系の混在（おそらく古韓音などをふくむ）を想定できる。また、「前後失レ

表2 欽明紀二年三月条（A）と顔師古注『漢書叙例』（B）の比較対照表  
（対応箇所がある場合は、テキストをゴシック表示）

A：帝王本紀、多有ニ古字一、撰集之人屢經ニ遷易一。	
B：漢書旧文、多有ニ古字一、解説之後、屢經ニ遷易一。	
帝王本紀：撰集の人がかわる	漢書叙例：漢書の旧文がかわる
A：後人習読、以レ意刊改、伝写既多、遂致ニ舛雜一、前後失レ次、兄弟参差。	
B：後人習読、以レ意刊改、伝写既多、弥更浅俗、	
帝王本紀での後人：「撰集之人」のうちの「後人」	
漢書叙例での後人：後代の人、末学膚受の人	
A：今則考ニ覈古今一、帰ニ其真正一。一往離レ識者、且依レー撰、而注ニ詳其異一。他皆効レ此。	
B：今則曲ニ覈古本一、帰ニ其真正一。一往離レ識者、皆從而积レ之。	
A：対応箇所なし	
B：古今異レ言、方俗殊レ語、末学膚受、或未ニ能通一、意有レ所レ疑、輒就ニ増損一、流遷忘返、穢濫実多。	
A：対応箇所なし	
B：今皆刪削、克復ニ其旧一	
A：ほとんど対応箇所なし	
B：諸表列位、雖レ有ニ科條一、文字繁多、遂致ニ舛雜一、前後失レ次、昭穆参差、名実虧廢。	

「帝王本紀」における舛雜・前後失次・兄弟参差のメカニズム

A：「撰集之人」が代わる⇒後の「撰集之人」が本文を改変  
↓  
「撰集之人」が加える伝写  
↓  
舛雜・前後失次・兄弟参差

『漢書叙例』における舛雜・先後失次・昭穆参差のメカニズム

B：『漢書』の完成⇒後代の人（末学膚受）の改変＋伝写⇒浅俗で増損を加えられ、  
流遷、忘返、穢濫の多い本文  
特に諸表列位では、  
舛雜・前後失次・昭穆参差

に、以上のような諸点から考えて、統一的な基準により系統的な記載が構成されたような編纂物ではないということも想定できよう。

二「帝紀」・「帝王本紀」と日継

「帝王本紀」の性格が、前節のような内容的制約をともなっているものとすれば、その作成に大王家や国家的な背景を考えることができようか。記載后妃が蘇我氏に限定されること、複数の表記大系からなる先行系譜の結合にもとづく系譜記載、「前後失レ次・兄弟参差」という混乱した記載内容などからみて、その作成に大王家や国家的な背景を想定することはできないと考える。やはり、このような史料をのこす主体は、蘇我氏において他には考えられない。蘇我氏が「帝王本紀」なるものを作成し、それが『日本書紀』の素材として使われるとすれば、それは記紀編纂のありかたとどのような関わりがあるのか、その点を「古事記」序文の記載から考えてみよう。

次、兄弟参差」という点から、系譜記載に比重があったこと、それとも異なる表記大系による先行系譜を結合した系譜（『上宮記』所引継体大王系譜のような）の存在を想定できる<sup>12</sup>。このような系譜だからこそ、結合に誤りがあれば、「前後失レ次・兄弟参差」は十分に起こりえる。最後

史料三 『古事記』序文<sup>13</sup>

(前略)

於是、天皇詔之、「朕聞、『諸家之所齋帝紀及本辭、既違正實一、多加虚偽』。當今之時不改其失、未經幾年其旨欲滅。斯乃、邦家之経緯、王化之鴻基焉。故惟、撰録帝紀、討覈舊辭、削偽定實、欲流後葉。」(後略)

記紀編纂の起点となったこの天武の口勅であげられている「帝紀及本辭」は、まさに諸家からもたらされたものであり、「既違正實、多加虚偽」えたものであった。これは「遂致舛雜」していた「帝王本紀」と内容的に一致する。

以上のことから、蘇我氏が作成し「伝写既多」く、「遂致舛雜」をさわめていた「帝王本紀」とは、『古事記』序文にいう「帝紀及本辭」、なかならず表記の類似性から見て、「帝紀」に相当するものと見てよい。当然、それは序文のいう「既違正實、多加虚偽」にあたり、まさに「考覈古今、歸其真正」す必要のあるものであった。その意味で欽明紀二年三月条の本文考定は、『古事記』序文に引く天武の意志どおりに行われた作業であったといえる。

従来、「帝王本紀」が正式の名称で、それは大王家の系譜一般が記述されたものと考えがちであった。そして、その略称が「帝紀」であるという見方も見られたが、むしろそれは逆である。

氏ごとに大王家との通婚関係を記した諸家の系譜的記述をふくむ史料一般を、『古事記』序文は普通名詞として「帝紀」と呼んだのである

り、特にそのうち、蘇我氏が残した史料が固有名詞たる「帝王本紀」なのである。もちろん、このような「帝紀」が「帝王本紀」だけに限られるわけではなく、かつて『日本書紀』私記類の中から粕谷興紀が復原した「帝王記」など、いくつかの記録が存在したと考えられる。<sup>15</sup> なお、『上宮聖德法王帝説』に引かれる「帝記」は、恐らくこうした「帝紀」の逸文を示した唯一の例と思われるが、以下のような内容のものである。

「少治田天皇之世、東宮厩戸豊聡耳命・大臣宗我馬子宿祢、共平章而、建立三寶、始興大寺」<sup>16</sup>

明らかに蘇我氏と大王家との関わりを記述したこの内容は、「帝王本紀」に起源をもつ可能性があると同時に、これら「諸家之所齋帝紀」に系譜的記述以外の内容も含まれていたという粕谷興紀の指摘を確認させてくれるものと思われる(ただ表記に一定の問題は残るが)。

このように考えれば、「帝紀」を「日繼」とイコールでとらえる冒頭で示したような『古事記』序文解釈はまったくとることができない。

史料四 持統紀二年十一月乙丑条<sup>18</sup>

…直広肆当麻真人智德、奉詠皇祖等之騰極次第。古云日嗣也。畢葬于大内陵…

史料四の記載から、「日繼(日嗣)」とは、「皇祖等之騰極次第」とよばれているのだから、大王のいわゆる地位継承次第のようなものと考えられるが、この「日繼(日嗣)」が上述の「帝紀」・「帝王本紀」<sup>19</sup>

とはまったく異質のものであることはいうまでもない。

### 三 口誦史料としてのフルコト

#### (一) フルコトの史料性格

では一方、旧辞の性格はどのようなものなのか。かつて藤井貞和は、旧辞をフルコトという和語を写したものととして、「古事」・「古詞」・「古語」などに対象史料を広げて分析し、これらを記紀編纂の時点から見た古伝承と位置づけた。<sup>(20)</sup>フルコトという和語によって対象史料を拡大したことは、旧辞を考える上でたいへん評価できるが、単に古伝承と規定しただけで、ほとんどその史料性格の解明を進めなかったのは、いかにも詩人と自認し、自らの仕事を「叙事詩」といつてのけた藤井らしい態度といえる。

しかし、旧辞の性格を具体的に指摘することなく、古伝承という言葉でくくってみても、「叙事詩」鑑賞ならともかく、歴史学的には大きな意味を持ちえない。せっかくの対象史料の拡大も、十分に生かされないうままであることに、私は大きな不満を感じた。そこで私は、フルコトの史料を検討するなかで、これを口誦技法にもとづく口誦伝承と位置づけ、特徴的な技法としての口誦技法の発掘と解明に基づき、国譲り神話の解釈とは異なる形で捉えかえたのである。<sup>(21)</sup>

この成果の上に立って、あらためてフルコトの史料をながめなおしてみよう。

史料五 フルコトの史料

・旧辞…「古事記」序文

「旧辞」↓「討賊」「誦習」「所誦」の対象。

・古事…「令集解」職員令神祇伯条の鎮魂に附された問答<sup>(22)</sup>

「問。鎮魂祭何神。答。神祇官式云。鎮魂祭神八座。神魂。高御魂。生魂。足魂。魂留魂。大宮女。御膳魂。辞代主。問。称。布利之由。答。古事。穴云。以下穴説は略…。」

・古詞…「儀式」大嘗祭卯の日の儀では、語部が古詞を奏した。

「伴佐伯宿称各一人率語部十五人（註略）亦入就位奏古詞。」<sup>(23)</sup>

この儀について「北山抄」は「其音似祝。又涉歌声」。出雲美濃但馬語部各奏之。云々と註す。<sup>(24)</sup>

・古詞…丹鶴叢書本「北山抄」の頭註「古次第云。語部奏古詞。其声如祝詞。賜松明読之。」<sup>(25)</sup>

・古語…「日本書紀」神武即位前紀辛酉年春正月庚辰朔条

「天皇即帝位於橿原宮。是歲為天皇元年。尊正妃為皇后

。生皇子神八井命・神渟名川耳尊。故古語稱之曰、於畝傍之

橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天原、而始

馭天下之天皇。号曰神日本磐余彦火火出見天皇焉。」

・古語…「儀式」においてはしばしば「古語」なるものが、細注で引かれる。

其の例：大嘗祭における悠紀院、主基院の宮垣に対する細注

「拵柴為垣、押収八重、垣末挿拵椎枝者。古語所謂志比乃和恵。」<sup>(27)</sup>

これらはいずれの場合でも、文字化されたものをいうとは考えられない。あくまで奏・曰（もう）すものであり、しばしば真仮名でその音声が表示される。その音声は「似祝」ており「涉歌声」るもので、抑



揚や調子をとまなう生の音声フルコトとされている。たしかに、『古事記』撰録の時代から見ればはるかに後の時代の史料ではあるが、フルコトの本質をかすかといえ伝える貴重な史料と考える。

## (2) 『新撰亀相記』の「旧辞」からみたフルコトの口誦性

生の発声に関わるものとしてのフルコトの性格を、さらにはつきりと示す史料として『新撰亀相記』の「旧辞」をあげることができる。

『新撰亀相記』は、『古事記』序文以外で「旧辞」の表現を唯一伝える貴重な資料であるが、亀ト書としての難解さや複雑な構成が禍して、その史料性格がこれまでに十分に把握されてこなかった。<sup>(28)</sup> ために一時期、偽書説も説かれるなど積極的な活用がなされにくい状況にあった。<sup>(29)</sup>

しかしそのような状況になったのも、ひとえにこの史料の構造と内容が未解明であったからにすぎず、『新撰亀相記』は平安前期にさかのぼる史料を含んだ貴重な資料であることに変わりはない。残念ながら、その史料性格をここで全面的に展開するのは、紙幅の都合もありできないが、概略をここに記しておきたい。

『新撰亀相記』とは、本来、『亀ト抄』とよばれる亀ト秘伝書の後半に抄録されていたもので(図1参照)、その冒頭部に「故拳古今一発連類一将一軸一」(367、368)とあるとおり、古今の亀ト関係の記述を部類わけし

て一つにまとめた、亀トに関する「秘事・口伝」の体系的集成である。<sup>(30)</sup> かつて私は抄写注文たる「秘事・口伝」の流传形態とその体系的集成という観点から、その史料性格を検討する機会をえ、表3に示す如き構成で『新撰亀相記』の史料構造がとらえられることを提起した。<sup>(31)</sup> 『新撰亀相記』冒頭の目録部と後に続く記載は、内容的に正しく対応しており、『新撰亀相記』は『亀ト抄』後半すべてにかかるものと理解できる。

3ウ	3オ	2ウ	2オ	3ウ	3オ	白紙	白紙	表紙	題案
			31	総説	亀ト抄				
8ウ	8オ	7ウ	7オ	6ウ	6オ	5ウ	5オ	4ウ	4オ
		卦	の	解	説				
13ウ	13オ	12ウ	12オ	11ウ	11オ	10ウ	10オ	9ウ	9オ
		卦	の	解	説				
18ウ	18オ	17ウ	17オ	16ウ	16オ	15ウ	15オ	14ウ	14オ
	②①	目録	部分	亀相記	序文	卜法	の細説		
23ウ	23オ	22ウ	22オ	21ウ	21オ	20ウ	20オ	19ウ	19オ
	14⑬⑫	⑪	⑩⑨⑧	⑦	⑥		⑤	④	③
28ウ	28オ	27ウ	27オ	26ウ	26オ	25ウ	25オ	24ウ	24オ
	29・28	27	26・25	24・23	21	20	19⑱⑰	16⑮	
33ウ	33オ	32ウ	32オ	31ウ	31オ	30ウ	30オ	29ウ	29オ
		空	白						
38ウ	38オ	37ウ	37オ	36ウ	36オ	35ウ	35オ	34ウ	34オ
奥書	空	第一跋				31	30		
						裏表紙		白紙	白紙

注) 『新撰亀相記』は、16オからはじまり37の第二跋で終わる。第一跋「天長七年八月十一日ト長上従八位下ト部遠藤」は26オにある4の秘事口伝末尾に記される。第二跋「天禄四年六月廿八日書訖(庚戌) 亀ト得業生正六位上ト部宿祢雅延」は37ウ。

図1 『亀ト抄』の構成

表3 「新撰亀相記」目録部分の整理

行数	番号	内 容	対応部行数
371	①	伊佐諾伊佐波両神生遊能己侶嶋本辭一條	408~416
371~372	②	同前両神生国土肇夫婦義火鎮祭本辭一條	416~429
372~373	③	不燈一火并三神所化本辭一條	429~444
374~375	④	伊佐諾命三神配定日月国主、科祓素戔命等本辭一條	444~455
376	⑤	八百萬神科素戔命千座置戸祓等本辭一條	456~483
377	⑥	天神降給国主本辭一條	484~500
378	⑦	中臣忌部阿氏掌ト兆班幣等本辭一條	500~503
379	⑧	天孫降坐日向千穗岑本辭一條	503~505
380~381	⑨	伊耶本和気天皇御世皇弟水齒別命殺曾波加理於神事先解除本辭一條	506~518
382~383	⑩	大長谷天皇御世禁制度人居屋上堅魚木奉禮代幣本辭一條	518~520
384~385	⑪	帶中日子天皇之大舌息長帶比賣命襲新罪本辭一條	520~527
386	⑫	略述龜經凡龜大意一條	527~533
387	⑬	同経四時支用五色龜忌日一條	534~536
388	⑭	述龜誓本辭一條	536~567
389	⑮	龜本社母鹿木神社灼ト用水本辭一條	567~572
390	⑯	四国卜部上祖仕奉ト兆本辭一條	573~580
391	⑰	四国卜部氏本辭一條	581~584
392	⑱	対馬嶋称両国本辭一條	584~585
393	⑲	安古事記用口伝本辭一條	585~598
394	⑳	始任ト長上一條	598~605
395	21	為ト齋戒一條	606~606
396	22	為ト肩乞詞一條	606~608
397	23	分用龜甲條数	608~615
398		供奉御ト用甲二枚一條	
399		灼ト充水用水方一條	
400	25	地天神人兆五枝主治一條	620~629
401	26・27・28	説地天各廿九卦神人各三十八卦兆三卦・體一二條	629~648
402	29	ト雜事乞ト詞方一章	649~819
403	30	供奉 御體ト火数増減一條	820~825
404	31	供奉 御體ト吉凶称候一條	826~871
405		乙卷 説地之称候	
406		丙卷 説天之称候	
407		丁卷 説神人兆三卦称候	

注) 行数はすべて、注(28)工藤著書でわりふられた行数。番号は下鶴が付した仮の整理番号。

従来、『新撰亀相記』は、中程にあたる605行目の「天長七年八月十一日ト長上從八位下ト部遠繼」(いわゆる第一の跋、図1参照)までと理解するのが通説であったが、それは誤りである。表3にも示したとおり、この部分は573~648行目におよぶ一つの秘事口伝となっており、そ

の中ほどにある作成年紀を『新撰亀相記』本体の跋文と誤認した結果が通説なのである。目録と内容を対照させて考える限り、『新撰亀相記』の作成年代は、いわゆる「第二の跋文」とされてきた天禄四年でおさえなければならない(図1参照)。

では従来、『新撰亀相記』の成立年代とされてきた「天長七年」以下の記載を含む部分(573~648)の史料構造は、どのように考えたらよいのだろうか。それを考える上で示唆的なのが東野治之の指摘である。かつて東野は、『孝子伝』や『那須国造碑』などを検討し、私なりの解釈をふくんでいえば、「序文的部分」云爾「本文(銘文)」という独特の本文を導く構文を見いだした。つまり、まず本文の内容を導き出す解説部分として序文的部分があり、「云爾」以下で具体的な本文が記される史料構造である。まさに、問題としている部分の史料構造は、これにあたる。具体的にその構造を示した図2を参照願いたい。

『新撰亀相記』に収録されたこの亀ト秘伝部分は、天長七年のト部遠繼による古説亀相を書き出した、まさに秘事口伝と評価できる。この結果を受けて、特に注目されることは、天長七(八三〇)年に源を発する史料において、旧辞は「皆以口誦」とされていることである。しかも、亀トも亦同じく口誦によって伝えられてきたこ

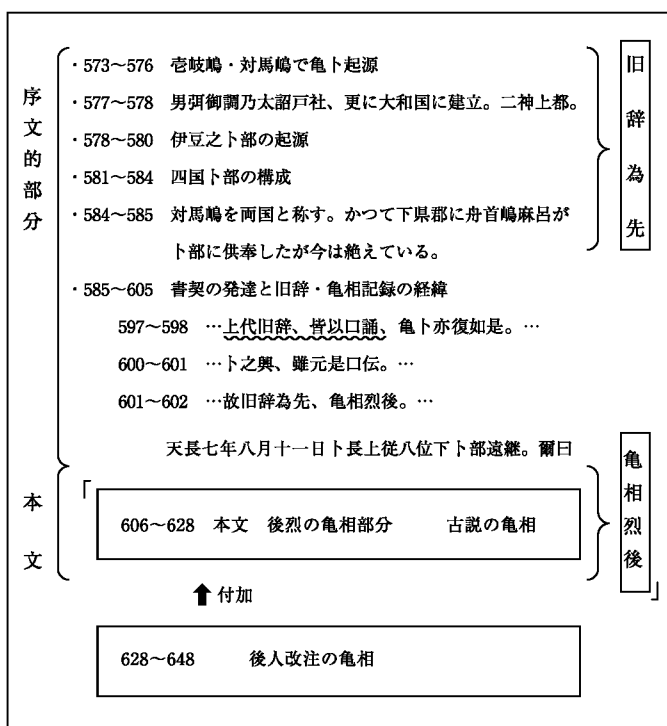


図2 天長七年ト部遠繼による古説亀の構造

以上のように、天長にさかのほる確かな史料によって、起源神話を含んだ「旧辞」の口誦性が強く示唆されるにいたった。生の発声に関わる文字テキストが「秘事・口伝」の流伝形態のもとに、こうした亀ト秘事口伝に集大成されていたのである。こうしたテキストは、たしかに文字化されたものにはなっていたが、生の発声に関わるものとして、フルコトと認識されたものと考えられる。その意味で、単なる文字記録としてのフミとは異なるものと考えられていたのである。

### (3) 小括

これまでのフルコトに関する考察の結果を簡単にまとめてみよう。

- ① 旧辞とは和語フルコトの一表現である。
- ② フルコトとは、本来古くから口誦で伝えられてきた生の声・言葉(コト)や伝承である。
- ③ たとえ文字によってその生の声・言葉(コト)や伝承が書きとめられていたとしても通常の文字記録(フミ)とは異なるものと認識されていたと考えられる。

## 四 『古事記』序文をどう読み解くか

これまでの検討にもとづいて、あらためて『古事記』序文の問題となる部分の読解を以下に試みるが、その際、あらためて注意すべき点は次のとおりである。

- ① 「帝紀」とは、「帝皇日繼」とは異なるものであり、諸家が

と、トの興は「口伝」によるなどという表現をともなっていることである。また、601～602の記載によれば、そうした亀トの口伝たる「旧辞」を先にあげて、それにもとづく亀相を後に列ねるとい、記載のスタイルが示されている。これは、573～585に記された、亀トの起源から四国ト部の起源に及ぶ神話的部分を「旧辞」ととらえて先にかかげ、606～628にあげた古説の亀相を後に烈ねるとい、ことを意味しているのであろう。つまり亀トやト部の起源神話が「旧辞」ととらえられているのである。

王家との関わりのなかで記録したフミと考えられること。

⑥「旧辞」とは、本来、生の発声による伝誦としてのフルコトを意味するものであったが、その発声を文字化した記録も含むものとして、認識されるようになった点。

⑦以上の二点に加えて、「古事記」序文の構造をしっかりとらえた上で読解すること。通説の如く、構造を無視して帝紀Ⅱ日継Ⅱ先紀、本辞Ⅱ旧辞といった対応関係のもとに理解する態度は採らないこと。

この三点をふまえて、序文の構造にしたがって問題となる部分の解釈を逐条的に試みよう。

⑧修史の起点となった天武詔

(1) 伝聞  
「朕聞、『諸家之所<sub>レ</sub>齋<sub>レ</sub>帝紀及<sub>レ</sub>B本辞、既違<sub>二</sub>正實<sub>一</sub>、多加<sub>二</sub>虚偽<sub>一</sub>。』」

(2) 伝聞への認識  
「當<sub>二</sub>今之時<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>其失<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>幾年<sub>一</sub>、其旨欲<sub>レ</sub>滅<sub>二</sub>斯乃、邦家之経緯、王化之鴻基焉<sub>一</sub>。」

(3) 方針  
「故<sub>レ</sub>惟、撰<sub>二</sub>録<sub>一</sub>C帝紀、討<sub>二</sub>覈<sub>一</sub>D舊辞、削<sub>二</sub>偽定<sub>一</sub>實、欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉<sub>一</sub>。』」

ここでは修史事業の起点となった天武の意図が示されているのだが、具体的には、⑧(1)天武が伝聞した内容、⑧(2)それに対する天武の認識、⑧(3)天武の方針、という三つの内容からなっている。

ここに出てくる「帝紀」とは、前節までの結論によれば総称、普通

名詞に相当するもので、特定の一作品に結びつく固有名詞ではない。<sup>⑨</sup>

Aの「帝紀」とBの「本辞」は「諸家からもたらされるもの」とあるので、明らかに物理的な写本になっている史料といえることができる。

そこで天武が求めているのは、Cの「帝紀」を撰録することと、Dの「旧辞」を討覈すること、そこに含まれている偽りを削り、実を定めて後の世に伝えんとすることである。このうち、AとCの「帝紀」は、諸家からもたらされたものとして、写本の形態をとることが明らかである上に、撰録せよというのであるから、文字記録を本質とするものと考えてよからう。

いっぽうBの「本辞」は写本の形態をとっていたと思われるのに対して、Dの「旧辞」は「討覈」されるものとある。「討覈」というのは、『日本国語大辞典』第二版によると、「たずねしらべること。たずねきわめて事実を明らかにすること」であり、必ずしも写本へと文字化することをあらわしたのではないことが注意される。このことは前節までの検討に見た如く、和語フルコトの史料が、古くから口誦で伝えられてきた生の声・言葉・伝誦を意味することとも相即する。やはりこのDの「旧辞」も、その本質は古くから口誦によって伝誦されてきた生の声、言葉、伝誦にあったと考えるべきである。

つまり写本の形をとって撰録することで「定実」されたC「帝紀」とは別に、真正な言葉としてのフルコト(D旧辞)を「欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉<sub>一</sub>」することが天武の意図だったのである。ちなみにこれほど有名な「帝紀」であるが、序文の中であらわれるのは、この天武詔の中だけであ

る。それは修史事業の進展にともない、その素材である「帝紀」よりもできつつある「日本紀」に関心が移っていったからではないだろうか。なお、Dの「旧辞」とBの「本辞」の関係については、論述の流れにしたがって次項で述べることにしたい。

### ⑧天武詔以後の経過

(1) 稗田阿礼の人となり  
「時有<sub>レ</sub>舍人。姓稗田、名阿礼、年は廿八。為<sub>レ</sub>人聰明、度<sub>レ</sub>目誦<sub>レ</sub>口、私<sub>レ</sub>耳勅<sub>レ</sub>心。」

(2) 天武の勅語と事業の未完成  
「即、勅<sub>二</sub>語阿礼、令<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>習<sub>一</sub> E 帝皇日繼及 F 先代旧辞」。然、運移世異、未<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>矣。」

つぎに、天武詔以降の展開を序文はどのように語っているのだろうか。天武詔によって『古事記』筆録の起点を示した後、序文は伝誦者稗田阿礼の人となりを示して(⑧①)、天武の勅語と事業の未完成的語る(⑧②)。そこで天武が阿礼に勅語したのは、あくまでEの「帝皇日繼」とFの「先代旧辞」を「誦習」する(ヨミナラフ)ことであった。

先述した如く、Eの「帝皇日繼」とはAやCの「帝紀」とは別のものであり、史料四に示されたような「皇祖等之騰極次第」、すなわち大王位繼承次第のごときものである。史料四を見る限り、「日嗣」が王族もふくめた大王家の系譜全体を示しているとは考えられないし、「帝紀」が系譜以外の要素を含んで、諸家に保管されていた史料であることもマッチしない。

むしろそんなことより、E「帝皇日繼」については、殯宮儀礼にお

いて口頭で誦み上げられるという点が、きわめて重要である。儀礼の場において生の声で発せられるという点で、口誦技法に彩られた韻律的な古伝誦としてのフルコト(旧辞) Ⅱ F「先代旧辞」と共通する性格をもつからである。EとFが並列して「誦習」対象にあげられるのは、ひとえにこのオーラルな性格にもとづくのであって、天武の勅語によって「定実」された真正のフルコトとして、一括してとらえることが可能なものであった。このことが、後段にあらわれるI「勅語旧辞」の表現を引き出したのである。天武の勅語に基づき誦習された真正のフルコトとしてE「帝皇日繼」やF「先代旧辞」は、I「勅語旧辞」へと一括されたのである。

ここで「誦習」が命ぜられた「帝皇日繼及先代旧辞」とは、独特の技法と抑揚をもって語り出される口誦史料Ⅱフルコトそのものであって、天武の意図は「帝紀」の撰録とは別に、生の音声としてのフルコトを保存することにあつたと考えられる。文字テキストたる写本を本質とする「帝紀」が、阿礼の「誦習」対象からはずされるのも当然である。

ただ、この肝心の「誦習」過程について、序文は詳細を伝えてはくれない。序文には、「誦習」の先生となるパフォーマーらしき人物はいつさい記されていない。阿礼の人となり(⑧①)で「為人聰明、度<sub>レ</sub>目誦<sub>レ</sub>口、私<sub>レ</sub>耳勅<sub>レ</sub>心」とあることから、「誦習」とは、何らかの前提となる文字テキストをもとに、生の声としてのフルコトを再生させる作業であつたと思われる。そしてその「旧辞」再生の前提となるテキ

ストこそ、諸家からもたらされたB「本辞」だったのであろう。B「本辞」は、諸家からもたらされた以上、物理的な形態をとる写本と考えざるを得ないし、「本辞」は返って読めば「コトノモト」＝言葉、伝承の本源である。これらの写本を前提に「討覈」をほどこして生の声に再生させるからこそ、B「本辞」はD以降、「旧辞」に変換され、まったく問題にされなくなるのである。

以上、阿礼の「誦習」とは、諸家からもたらされた写本としてのB「本辞」を「討覈」した真正なフルコト（その内容はE「帝皇日繼」とF「先代旧辞」）を生を音声で再生し、いつまでもこの世に伝誦してゆくことを意味するものだった。

つぎに、②末尾、「未<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>矣」の意味するものについて考えてみよう。通説では、「誦習」が行われたが、「撰録」が行われなかったことを意味するとする。先にも述べたように天武の究極の意図は真正のフルコトを後世に伝えることにあるのだから、未だ行われなかった「其事」とは、直接には「欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉<sub>一</sub>」という営みに他なるまい。後述する如く、その営みは阿礼の「誦習」という形ではじまったが、当初から「撰録」を意図していたとは考えられない。撰録の経緯や天武の勅語に「誦習」しか出てこないことを考えると、天武の意図たる「欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉<sub>一</sub>」を実現する手段として「撰録」が意識されたのは、元明朝になってからと思われる。結果として、これまでフルコトにつき「撰録」という手段で「欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>後葉<sub>一</sub>」してこなかった点を、「未<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>」が意味しているとするならば、通説は正しい。

④今上＝元明の徳をたたえる文章

⑤元明詔

(1) 元明の  
撰録命令  
「於<sub>レ</sub>焉、惜<sub>二</sub>G旧辞<sub>一</sub>之誤<sub>レ</sub>忤<sub>二</sub>、正<sub>二</sub>H先紀<sub>一</sub>之謬<sub>レ</sub>錯<sub>二</sub>、以和銅四年九月十八日<sub>一</sub>、詔<sub>二</sub>臣安万侶<sub>一</sub>、『撰<sub>二</sub>録稗田阿礼所<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>之<sub>一</sub>I勅語<sub>二</sub>旧辞<sub>一</sub>以獻上<sub>二</sub>者<sub>一</sub>、」

(2) 撰録方針  
「謹隨<sub>二</sub>詔旨<sub>一</sub>、子細採摭<sub>二</sub>」

⑥表記方針

⑦全巻構成

元明の徳をたたえる文章④に続いて、序文は⑤(1)元明の「古事記」撰録詔を掲げた後、⑤(2)その撰録方針を示す。

G「旧辞」は誤忤したもの（誤「あやまり」・忤「逆らう、違ふ、乱れる」）ととらえられており、H「先紀」も「謬錯」を含むものと考えられている。H「先紀」については、明確には示されないが、正しいものとしての「今紀」が意識されているのではないだろうか。それに対するものとしての「先紀」とは、既にあげられている「帝紀」「旧辞」の対応関係をもとに考えれば、誤りを含んだ状態にある先の「帝紀」、いわば「先帝紀」のことを意味すると思われる。「旧辞」への対応関係から二字を整える必要があること、先帝の紀と誤解されるおそれがあること、などから「先紀」という表現をとることになったものであろう。すなわち、G「旧辞」の誤りを惜しみ、H「先紀（先帝紀）」の「謬錯」を正すため、阿礼所誦のI「勅語旧辞」を「撰録」「献上」せよ、というのである。

I「勅語旧辞」については、先述したので繰り返さないが、この語に付された「勅語」の意義については、関説しておかなければなるまい。宣長以来、この「勅語」を根拠に、「天武が口ずから」阿礼に「旧辞」を伝誦したと考える学説が唱えられており、未だにこの学説を採っているものも一部に見られる。<sup>(36)</sup>まことに驚異であるとともに、宣長の偉大な影響力を感じずにはいられない。

先述した如く、序文のなかで阿礼の「誦習」に師匠としてのパフォーマーを見いだすことはできない。口誦技法による生の音声としてのフルコトの伝誦は、多年の修練を必要としたと考えられ、とても天皇が伝誦に関与できるようなものではなかったと考えるべきだ。Iの「勅語」とは、EとFが天武の意図したところのフルコトとして、一括できることを示すために、「旧辞」にあえて冠された表現である。その意味するところは、誤りを含んだものから、いろんな「旧辞」がある中でも、とくに「天武の勅語が命じた意味での真正な」という限定をIの「旧辞」にあたえる点にある。「天武の口ずから語り聞かせた」という解釈は、序文の構造を無視し、かつ口誦技法の伝誦という難業をまったく顧慮しない謬説であるといわざるを得ない。

つぎに②「撰録方針」についてのべる。「詔旨」とは直前の元明詔を受けており、I「勅語旧辞」を記したテキストの内容を、そのまま細大漏らさず撰録するものと考ええる西宮一民説が妥当と考える。<sup>(37)</sup>阿礼の「所誦」にかかるI「勅語旧辞」とは、Bの「本辞」と呼ばれる写本群から、「討駁」をして作成された特別の本にもとづいて口誦されるものだ

ったと考えられる。このような特別の稿本とは、西条勉の言葉で言えば、「阿礼誦習本」ということになるが、<sup>(38)</sup>このような文字テキストを前提にして初めて、元明の撰録命令にもとづく基本方針と次の表記方針⑤（「然（シカレドモ）」からはじまる）のつながりが理解できる。

口誦される生の声としてのフルコトと文字テキストとの関係については、これまでの研究史はもちろん、口誦テキストの本質とも関わる問題なので、次節において詳述する。

## 五 『古事記』撰録の本質

### （1）口誦と文字テキストの相補的關係

前節でもつとも述べたかったことは、口誦史料としてのフルコト＝旧辞を生の声として後世に伝えてゆくことが、天武の意図であったということである。阿礼に対する勅語の中には、一度たりとも「撰録」の語は表れない。旧辞に対する天武の意図は「撰録」ではなく、生の声として真正のフルコトを伝誦させてゆくことにあったと考えるべきだ。

しかし、そのように考えると、前節でも所々でふれたような誦習の前提となるテキスト、なかんずく「阿礼誦習本」をどのように理解するのか、という問題点がさけられなくなってくる。文字テキストが前提として存在する以上、当初から「撰録」がめざされていたのではなく、と考えたくなるわけである。

津田左右吉は、この点も考慮して、『古事記』を安易に口誦史料へと結びつけることをいまいめた。彼は、古事記が前提テキストからの

文字化によっていることを、論証評価した上で、

①村の古老の昔語りを聞いてそのまま文字化したような民衆的基盤をもつものではないこと。

②あわせて、「帝紀」・「旧辞」の撰録・討駁に、王権に結集する諸豪族の政治的利害が反映すること。

をあげてその高度の政治性を指摘した。<sup>39)</sup>

私も、以上の津田の指摘を共感を持って継承する。ただ、その前提となった文字テキスト(Bの「本辞」)の性格を、「歴史書の編纂」という枠組みから形成されたものと理解することには賛成できない。むしろ、「阿礼誦習本」の前提となったテキスト群の多く(すべてとはいわない)は、口誦伝誦にもとづくものであったのではないかと考える。<sup>40)</sup>すなわち、「古事記」本体が、オーラルな語りをそのまま文字化したものと考えることはできないにしても、それが前提とした複数の文字テキスト群(B「本辞」)のほうは、オーラルな語りを文字化した性格を持っていたのではないか、ということである。

津田以来、「古事記」のオーラルな性格を否定する研究史には、口誦史料と文字テキストとを対立的にとらえすぎる傾向があったように思う。確かに、口誦テキストには、定型的表现、繰り返し、語と語との係り関係など独特の約束事があり、通常の文字テキストの表現とは異なる文体をとることが知られている。<sup>41)</sup>しかし、そのいっぽう、伝誦にあたって、必ず伝誦者が写本を作成保持すること、伝誦の発展や細部の揺れによって、伝誦者間で写本の揺れが発生し、異本が形成され

るということも明らかになってきた。『イリアス』『オデュッセイア』などホメロスの作品群はもとより、『平家物語』諸本など、それがほんとうのホメロスや『平家』なかを見極めがたい状況は、それが口誦と文字の双方で伝承されてきたことを示す証拠なのである。<sup>42)</sup>ある意味、文字テキストは、たえず細部に発展と変異を含みこむ口誦テキストの一瞬を、それも抑揚や強弱など生の声の持つ迫力を除去した形で限定的に捉えたものにすぎない。

このことを生の発声としてのフルコトとそれを写本化したフルコトフミとの関係として、異本発生のメカニズムに概念図化すれば、図3のようなものになる。先述した如く、阿礼には伝承の師匠となりうべきパフォーマーはいなかったもののようで、ひとえに残されたさまざまな文字テキスト(B「本辞」)をもとに「討駁」を進め、その伝誦を会得してゆくほかなかったと考えられる。その「討駁」の中で彼自身の伝誦にもとづくフルコトフミⅡ「阿礼誦習本」が形成されてきたのであろう。

このように考えれば、多様な先行テキストを「討駁」してゆく中でひとつの「阿礼誦習本」が形成されることも理解できるし、その形成はあくまで生の声としてのフルコトを伝誦することと、相補的な意味あいを持つものとして合理的に理解できる。

つまりB「本辞」諸本や「阿礼誦習本」の存在は、必ずしも天武の意図が「撰録」にあったことを示すものではなく、むしろ生の声としてのフルコトの伝誦にこそあったことを相補的に示すものと考えられる。<sup>43)</sup>



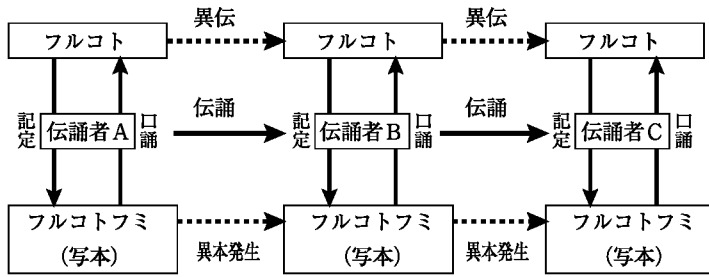


図3 フルコトの流伝過程と異本発生メカニズム

## (2) 「古事記」「日本書紀」の性格と関係

最後に、以上のような序文読解を通じて、浮かび上がってくる記紀筆録編纂の過程と両書の本質を、簡単にまとめてみたい。

まずは、その筆録編纂の過程について述べよう。序文にあらわれた天武詔の意図は、王家はもちろん、諸家に伝わる文字記録としての史料群（帝紀（スメロキノフミ）と、口誦技法によって伝誦されてきた生の音声としての語り（旧辞（フルコト）の二つについて、共に「削偽定実、欲流後葉」とすることになった。

そこで、旧辞（フルコト）については、口誦テキストとしてB「本辞」の諸写本が諸家から集められ、「阿礼誦習本」を作るための討敷に付されたのである。「阿礼誦習本」にもとづいて口誦される生の声こそ「勅語旧辞」に他ならないが、「欲流後葉」という天武の意図は、阿礼にかわる伝誦者を育てあげない限り果たされることがなかったのである（「未レ行「其事」矣」）。

しかし天武朝に「年は廿八」だった阿礼も、元明朝には齢五十を超えて老齢をむかえるようになっていた。フルコトを

後の世に伝えてゆくという天武の意図は、新たな伝誦者がいなければ、いずれ来たるべき阿礼の死とともに潰えてしまうことになる。現代ならレコーダー一つで録音すればすべてを残すことが可能であるが、新たな伝誦者を育てることもないまま阿礼の高齢化が進んでしまった以上、残された道は「撰録稗田阿礼所誦之勅語旧辞」に献上する以外になかったものと考えられる。元明朝になって急に「撰録」が問題化してくるのには、そのような背景があったのである。

もちろんその作業は、「討敷」によって正統なフルコトの原本となつた「阿礼誦習本」をベースとして、阿礼の誦んだ内容をもとにテキストを整えることで果たされた。元明の勅令からわずか四ヶ月で撰録献上がなされた要因は、この「阿礼誦習本」の存在ということにつきる。わずか四ヶ月という短期間での撰録献上には、阿礼の健康状態が影響していた可能性もあながち否定できず、最終的に献上された正本が阿礼の死によって不完全な部分を残していた可能性も十分あり得よう。こうして「古事記」は、まさに「フルコト」を書き記した「フルコトフミ」そのものとなったのである。

この結果、「古事記」は伝誦テキストの常として、年紀を欠きクロノロジカルなものにはならなかった。国家の正史たる『日本書紀』が、神代紀をのぞいて、基本的に編年体（本紀）の体裁を貫いていることは対照的である。もちろん『古事記』は全体がフルコトであるのだから、『日本書紀』に見られるような「古語」の引用も一切ない。

また、減びゆくフルコトを書き記したフミであるから、撰録時点と

しての「現代」に近づくほど、内容が薄くなる。仁賢天皇以降、「古事記」の内容がほとんど系譜を中心とする簡略な記述となり、ついには推古天皇をもって終わるのは、フルコトと呼べる史料の中心がほぼ五世紀までのものと意識されており、七世紀以降はまったくフルコトの範囲外にあったことを示しているのである。このような「古事記」の記述のありかたこそ、フルコトフミとしての性格が、その記述構造自体にあらわれているものといえよう。

また、フルコトの中心が五世紀までにあるということは、その伝誦と衰退の時期が主として五・六世紀にあったことを示しており、天武の時代にはそれを断片的に記した「本辭」くらいしか残っていないのであろう。このことは、伝誦の衰退が『日本書紀』の伝える文字や暦などの伝来と並行してすすんだことを予想させるものである。<sup>44</sup> 文字文化の本格的伝来が、口誦文化を変質解体させてゆく過程をここに見ることができようが、それは先述した如く決して対立的なものではなく、両者の相補的な関係のもとで漸進的に推移してきたものと考えられる。

こうしたフルコトの伝誦とは別に、諸家から集められた帝紀の「削偽定実」が推し進められ、誤りの多い「先紀」をただした決定版の正史Ⅱ『日本書紀』が編纂された。その編纂のベースに阿礼の伝誦するフルコトやその依拠する「阿礼誦習本」などが参照されたことは、文字以前の太古の神代から書き起こす以上、必然である。それゆえ、「古事記」の撰録とは、正式な修史事業の根本史料を整備するという意味

で修史事業の一環とはいえようが、それはあくまで自治体史の「資料編」に相当するものにすぎず、「歴史書の編纂」Ⅱ修史事業そのものとは、ほど遠いものと考えなければならぬ。<sup>45</sup>

このような性格のものであるから、「古事記」は公的な歴史書たる『日本書紀』とは別に、撰録当初から伏流してゆく運命になわされることになった。伝誦の発願者たる天武の王家に『古事記』が献上されたのも、天武の詔の意図を完成させる意味があったものと思われるが、結果として完成された歴史書としての『日本書紀』とは、流布や受容の点で比べものにならないくらいの違いを、「古事記」に生むことになってしまったのである。<sup>46</sup>

このように考えると、「古事記」を「日本最古の歴史書」と考えることに、かなりの違和感をおぼえざるを得ない。現存する日本最古の歴史書といえるのは、いうまでもなく『日本書紀』に違いない。「ほぼ同じ時に、なぜ接近した二つの歴史書が編まれたのか」といった疑問は、そもそも問題の立て方からしてまちがっているのである。

以上の如く、「古事記」と『日本書紀』には、伝誦テキストと国家の正史という史料性格の違いが存在し、そのことが本文の構成や筆録・編纂の事情、その後の受容・流布のありかたにまで、大きな違いをもたらすことになったと考える。

## おわりに 残された課題

これまで一・五の各節にわたり、序文に見える帝紀と旧辭の史料的

性格を検討し、その結果に基づいて、これまで十分にとりくまれてこなかった『古事記』序文の読解につとめてきた。その結果はあらためて繰り返さないが、これまで考えられてきた帝紀・旧辞の史料性格やそれにもとづく『古事記』・『日本書紀』の本質把握に大きく異議を唱えるものとなった。たしかに先学の中でも菅野雅雄や藤井貞和などは、『古事記』について旧辞のみを撰録したものにとらえ、本稿同様正しく評価しているが、その下敷きとしている帝紀・旧辞の性格把握は、通説的把握の枠を出ておらず、このため序文の読解や『古事記』撰録の提起するさまざまな問題に十分答え得ていない憾みがあつたように思う。

とはいえ、本稿として序文読解の提起する内容を、『古事記』や『日本書紀』の細部の隔々にまでわたって検証しきつたわけではない。前提テキストたる「本辞」がすべて厳密な意味での口誦テキストに限定できるかどうか、今後の研究が必要である。すぐに思いつくものでも、瀬間正之が指摘した如く、『経律異相』など漢訳仏典の影響を、『古事記』本文に指摘できることがある<sup>48)</sup>。また、多くの歌謡を含むこと、一部に声注を記すなど、生の発声を前提とした記述もたしかに見られるのではあるが、『古事記』の本文自体は全体として散文の性格を強く持つように思われる。このことが生の発声を目的とする伝誦テキストとしての性格を、これまで見えにくくさせていた要因であろう。

思うにそれは、阿礼自身が直接、師について誦習したのではなく、文字テキストにもとづいて、誦習にあたったことと関係があるのであ

ろう。本来、伝誦テキストに由来しないテキストであっても、誦習の時点でフルコトと認定されることにこそ意義があつたのであり、いったん認定されてしまえば、誦習者たる阿礼はそれを独自の抑揚と調子で、生の声に置換してゆかなければならなかった。少なくとも目指されたのが誦習であつたとする序文の内容に従う限り、そのように考えざるを得ない。その結果、口誦テキストに由来しない多くのテキストが、阿礼の誦習対象に取り込まれることになつたのではないかと思量する。

この点を考える上で示唆的なのは、『平家物語』におけるテキストと語りの相互関係理解である。一般的に『平家物語』のテキスト系統は、読み本系と語り本系に分けることができ、後者については琵琶法師などの語りとの関連性が想定されている<sup>49)</sup>。これら語り本系のテキストは、図3に示したような口誦テキストの流传過程のもとに、かつてその異本生成が理解されてきたが、近年の研究では、むしろ読み本系テキストからの書承を契機に、語り本系テキストが生成されてくる側面が重視されるようになってい<sup>50)</sup>る。本来、平家語りと密接な関連性を有するはずの語り本系『平家物語』について、文字テキストを媒介にその流传を理解できるということは、文字文化の成熟がさらに進んだ中世文学段階のこととはいえ、阿礼の誦習と文字テキストとの関係を考える上で示唆的であろう。

即ち文字テキストと口誦テキストは、必ずしも口誦から文字へとといった一方的な関係にあるのではなく双方向的な関係にある、換言すれば

前述した如き相補的關係にあるのではなからうか。琵琶語りとの関連が想定される『平家物語』のテキストが、すべて韻文の形をとったものではないこともあわせて、この点は、今後『古事記』の本質をつきつめてゆく上での重要な論点となるだろう。<sup>53)</sup>

このように生の発声と文字テキストの相互関係を、双方的・相補的なものとして理解する見通しにたつことによって、たとえ全体として散文の性格を持つとしても、『古事記』本文に伝誦テキストとしての性格を十分認定することができるのではないかと考える。

ただ、こうした見通しに立つとしても、『古事記』や『日本書紀』の本文批判をフルコト論の見地から深化させるといふ課題は、依然として残されるのである。もちろんその課題は、日本文学研究などで流行したいわゆる「作品論」などに議論を矮小化させるのではなく、『古事記』・『日本書紀』を律令制以前の国家社会を考えるための歴史史料として、積極的にどう評価してゆくのか、という遠大な課題に結びついてゆかなければならないだろう。

最後にもう一つ大きな課題となるのは、中世の史料や口誦文学との関係で、フルコトをどう位置づけるかという問題である。

帝皇日継や先代旧辞、すなわち勅語旧辞の口誦性については、上代よりも中世文学研究の分野において、語り物文学の淵源に位置づけようとする試みとして、かつて積極的に評価されていた。<sup>54)</sup> その当否もふくめ、日本における口誦テキストの系統や諸関係を明らかにしてゆくことが、今後大きな課題となってくるだろう。

また文学とはべつに、中世史料中にしばしば見られるフルコトフミの問題もあげておかなければならない。いくつの中世史料の中に断片的ながら「古事記」と呼ばれる史料が引用されており、これらと現存『古事記』との関係が従来からも注目されてきた。

それらの多くが、現存『古事記』との関係や誤写などで説明できるものとされ、これまであまり積極的な評価がなされてこなかったが、図3に示したような流传過程のもとに多様な異本をもなったフルコトフミを想定すると、現存『古事記』とは異なる「フルコトフミ」の存在を、あながち否定することはできないのではないかと考える。その最たるものは、『釈日本紀』において「上宮記」の継体大王系譜を解釈するために、兼方が言及した「古事記」であり、これはあきらかに現存『古事記』とは異なる内容をもっている。<sup>55)</sup> もちろんその内容を盲信することは慎まなければならないが、これらを慎重に研究することによって、埋もれた古代史料としてのフルコトを発掘し、『古事記』や『日本書紀』を相対化するということも、可能性としてはまだ残されているように思う。

ここにあげた諸課題は、いずれにせよ大きな課題であるが、本稿での問題提起にもとづいて、今後取り組んでゆけることを期待したい。いまはただ、それらにとりつく前提として、本稿が提起した帝紀とフルコトの性格把握は妥当であるか、序文の理解に問題はないか、読者諸氏のご批評を期待しつつ、ここに擲筆する。

## 【註】

- (1) 近年、古市晃は、王宮の性格をキーとして、令前の国家社会、なかんずく五世紀の王権を解明しようとしている（古市晃「五、六世紀における王宮の存在形態―王名と叛逆伝承―」『日本史研究』第五八七号、二〇一一、同「倭王権の支配構造とその展開」『日本史研究』第六〇六号、二〇一三）。
- (2) 「帝紀」・「旧辞」の史料性格にもつき記紀を理解しようとする研究姿勢に初めて本格的批判を加えたのは、神野志隆光「『帝紀』と『旧辞』」(『古事記の達成』、東京大学出版会、一九八三)である。神野志は「古事記」から「帝紀」・「旧辞」を論ずることは困難だとして、「作品」としての分析を主張する。序文の「帝紀」・「旧辞」を論ずること、すなわち成立論的視野を放棄したうえで、以後、神野志の「作品」論が展開されてゆくのである（神野志隆光「古事記の世界観」吉川弘文館、一九八六、同「古事記天皇の世界の物語」NHKブックス、一九九五）。
- (3) さらに近年では三浦佑之が「古事記研究を学問的に成り立たせるためには、古事記本文から「序」を切り離してしまうべきだ。私の主張の眼目は、疑惑のうずまく「序」を根拠に、古事記の成立を論じるのはやめようということである。」とのべ、「古事記」序文偽書説を展開している（『古事記のひみつ 歴史書の成立』吉川弘文館、二〇〇七、一一四頁）。
- (4) 後論する如く、本稿では、特定の一本として「帝紀」・「旧辞」を考えるのではなく、あくまで普通名詞として帝紀・旧辞をとらえる立場をとる。ゆえに一・以降、引用など特別の場合以外は、帝紀・旧辞と「」つきで表記しないことをこわしておく。
- (5) 津田左右吉『日本古典の研究』上、第一編第四章「記紀の由来、性質、及び二書の差異」（『津田左右吉全集』第一巻、岩波書店、一九六三）、倉野憲司「帝皇日継と先代旧辞」（『古事記論攷』、立命館出版部・京都印書館、一九四四）、武田祐吉「古事記研究 一帝紀攷」（『武田祐吉著作集』第二巻、角川書店、一九七三）。
- (5) 新編日本古典文学全集3『日本書紀②』の「帝王本紀」に対する頭注では、「記序にいう「帝紀」「帝皇日継」などの類で、記紀から「帝王本紀」なるものを推定すると、代々の天皇の皇位継承の次第及び氏族との婚姻をふくめた皇族の歴史（系図ではなく文書体）を指すと考える」（三六五頁頭注三）とある。
- (6) 粕谷興紀「大草香皇子事件の虚と実」（『皇學館論叢』一一巻四号、一九七八）。
- (7) 仁藤敦史「王統譜の形成過程について」（小路田泰直・広瀬和雄編『王統譜』、青木書店、二〇〇五）、仁藤敦史「継体天皇」（鎌田元一編『日出づる国の誕生』古代の人物①、清文堂出版、二〇〇九）、矢嶋 泉「古事記の文字世界」第一章の注(50)（七一頁）、終章（吉川弘文館、二〇一一）。
- (8) 新編日本古典文学全集3『日本書紀②』三六二―三六七頁（小学館、一九九六）。
- (9) 新編日本古典文学全集3『日本書紀②』二五八―二五九頁（小学館、一九九六）。
- (10) 前注(4)津田左右吉『日本古典の研究』上、四九頁。
- (11) 『漢書叙例』のテキストについては、『漢書一紀』二頁（中華書局、一九六二）所収のものを一部新字体にあらためるなどして使用した。
- (12) こうした令前古系譜が生みだされてくる背景については、拙稿「令前古系譜の流伝過程と記紀の筆録・編纂」（発表予定）を参照のこと。
- (13) 古事記のテキストは、すべて西宮一民編『古事記 修訂版一六刷』（おうふう、二〇一二）による。
- (14) 「帝紀」と「旧辞」を宮廷に伝わっていた固有の一本であろうと推定したのは津田左右吉である（前注(4)津田著書、六一頁）。現在、この津田説を受けつぐのは笹川尚紀である（「『帝紀』・『旧辞』成立論序説」、史林第八三巻第三号、二〇〇〇・「『日本書紀』の編纂と大伴氏の伝承」、『日本史研究』第六〇〇号、二〇一二）。これに対して、早くから帝紀・旧辞を普通名詞でとらえるべきことを主張したのは、岩橋小彌太であった（『増補上代史籍の研究』上巻、四〇頁、吉川弘文館、一九

- 五六)。この考えは、神野志隆光「神名列挙の方法」(前注(2)「古事記」の達成)一八四頁)や磯前順一(「記紀神話と考古学」九〇)九一頁、角川学芸出版、二〇〇九)など、広い支持を得ている。
- (15) 前注(6) 粕谷興紀論文。
- (16) テキストは、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉「上宮聖徳法王帝説 注釈と研究」四六頁、吉川弘文館、二〇〇五)による。
- (17) これらの「帝記」と「帝王本紀」に加えて、ともに蘇我氏がその作成に関与したという観点から、推古紀二十八年は歳条と皇極紀四年六月己酉条にあらわれる「天皇記」・「国記」が問題になってこよう。「弘私記」序では、「帝王本記」を「天皇記」・「国記」に比定しているようだが、「天皇記」については、乙巳の姿に際して焼却されたこともあり、「日本書紀」の編纂素材としての「帝王本紀」との関係については、今後の課題とせざるをえない。なお「天皇記」・「国記」については、関根淳「天皇記・国記考」(「日本史研究」第六〇五号、二〇一三)を参照。
- (18) 新編日本古典文学全集4「日本書紀③」四八八頁(小学館、一九九八)。
- (19) 地位継承次第については、義江明子「日本古代系譜様式論」(吉川弘文館、二〇〇〇)を参照のこと。
- (20) 藤井貞和「物語文学成立史 フルコト・カタリ・モノガタリ」(東京大学出版会、一九八七)。
- (21) 拙稿「国譲り神話の解釈について―口誦句分析から見た令前のオホミヤ―」(「市大日本史」第3号、二〇〇〇)。なお、この拙稿は、その後、西宮一民「古事記―修訂版―六刷」(おうふう、二〇一二)七二頁頭注4に戸谷高明の論著(同書七三頁頭注10)とともに採りあげられ、そこで提起した国譲り神話の解釈が、西宮最晩年のテキスト解釈に全面的に受けいれられることとなった。
- (22) 国史大系(普及版)「令集解第二」、巻二職員令、三二頁(吉川弘文館、一九七八)。
- (23) 「儀式」巻第三、一〇七頁(新訂増補故実叢書31「内裏儀式・内裏儀式疑義辨・内裏式・儀式・北山抄」、明治図書出版、一九五四)。
- (24) 「北山抄」巻第五、四二三頁(新訂増補故実叢書31「内裏儀式・内裏儀式疑義辨・内裏式・儀式・北山抄」、明治図書出版、一九五四)。
- (25) 丹鶴叢書本「北山抄」巻五、頭注(「丹鶴叢書 故実」一七八頁上段、国書刊行会、一九一四)。
- (26) 新編日本古典文学全集2「日本書紀①」二三二頁(小学館、一九九四)。
- (27) 「儀式」巻第三、一〇〇頁(新訂増補故実叢書31「内裏儀式・内裏儀式疑義辨・内裏式・儀式・北山抄」、明治図書出版、一九五四)。
- (28) 「新撰亀相記」の本格的な研究としては、工藤浩「新撰亀相記の基礎的研究」(日本エディタースクール、二〇〇五)をあげなければならない。難解なテキストに対して、地道な写本探求の上に校訂を施した本文は、現在もつともよるべきテキストと言えよう。しかし残念なことに、底本とした梵舜自筆の東京大学本(「東大本 新撰亀相記 梵舜自筆」(大学書院、一九五八))と対になる天理図書館本(天理図書館分類・請求記号四七―六(天理図書館編「吉田文庫神道書目録」一七五頁上段、天理図書館、一九六五)を校訂の対象に含んでいないこと、通説的な「新撰亀相記」理解の上に底本の現状に従わない行番号を付したことなど、問題点も残っている。ただ、混乱を避ける意味と著者の並々ならぬ努力に敬意を表して、本稿ではこの書の付した行番号とテキストを使用することとする。なお、この天理図書館本については、昨年、奈良国立博物館での特別陳列に出品された。詳しくは、特別陳列「古事記の歩んできた道―古事記撰録一三〇〇年―」二二頁(奈良国立博物館、二〇一二)も参照のこと。
- (29) 西宮一民「古事記に依拠した『旧記』の発見―『新撰亀相記』・『年中行事秘抄』の研究から」(「皇學館大学紀要」第十三輯、一九七五)は、「年中行事秘抄」所引「旧記」の発見というすばらしい成果を上げた論考であるにもかかわらず、「新撰亀相記」を偽書と断定するという惜しんでもあまりある誤りを犯した。西宮は晩年この誤りを撤回した上、大著「古事記の研究」への収録をさせたという(工藤浩氏の御教示による)。ただこの瑕疵があるとしても、この論文の価値は失せるものではなく、

大著への未収こそ惜しまれるものである。

- (30) 抄写注文たる「秘事・口伝」の流传とその体系的集成にもとづく宗教的テキストの生成流传形態に関しては、拙稿「聖徳太子伝の史料性格」(武田佐知子編「太子信仰と天神信仰―信仰と表現の位相―」思文閣出版、二〇一〇)を参照。
- (31) 「新撰亀相記」の史料性格については、東アジア権異学会第五三回定例研究会、特別企画「新撰亀相記の世界」(二〇〇七年九月二三日、於関西学院大学梅田キャンパス)にて「新撰亀相記」と氏族伝承」と題する口頭報告を行った。内容が大部分かつ多岐にわたることもあり、これまで発表の機会を逸しているが、いずれ発表する予定であるので、詳細については発表後の参照にゆずる。
- (32) 注(28)工藤著書はもちろん、最近出版された沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編「古代氏文集」(東京大学出版会、二〇一二)所収のテキストもこの通説的解釈のもとに「新撰亀相記」テキストを提示するが、本文でも述べる如く誤りである。なによりも「新撰亀相記」は、亀ト秘事口伝の書であって、氏文の類とは性格を異にする点で「古代氏文集」への収録は不適當であろう。
- (33) 東野治之「那須国造碑」(『日本古代金石文の研究』岩波書店、二〇〇四)。
- (34) 前注(14)参照。
- (35) 討駁(とうかく) (『日本国語大辞典 第二版』第⑨巻九一四頁(小学館、二〇〇一))。
- (36) 志水義夫「古事記生成の研究」第一部第三章「勅語旧辞と御製歌と」(おうふう、二〇〇四)。
- (37) 西宮一民「古事記の研究」I序文篇 第三章七三頁(おうふう、一九九三)。
- (38) 西条勉「阿礼誦習本の系統」(同「古事記の文字法」笠間書院、一九九八)。あくまで管見であるが、この「阿礼誦習本」という表現を早くからもちいたのは、前注西宮一民「古事記の研究」(六〇頁)であろう。
- (39) 津田左右吉「日本古典の研究」上、第三編第二十二章(第二十三章「神代史の性質及び其の精神」)(『津田左右吉全集』第一巻、岩波書店、一

九六三)。

- (40) 前掲注(21)拙稿を参照。
- (41) 口誦文化と文字文化の関係を総合的に叙述したものとしては、W・J・オング著、桜井直史ほか訳「声の文化と文字の文化」(藤原書店、一九九二)を参照。また、社会人類学的見地から注目すべきは、川田順造「口頭伝承論」(河出書房新社、一九九二)があげられる。
- (42) 「イリアス」「オデュッセイア」などギリシア叙事詩については、松本仁助「ギリシア叙事詩の誕生」IV「トロイア戦争の伝承と口誦詩としての「イリアス」、オデュッセイア」(『世界思想社、一九八九)、平家物語などいくさ物語の世界については、山下宏明「いくさ物語の語りと批評」(世界思想社、一九九七)、同「語りとしての平家物語」(岩波書店、一九九四)などを参照。また、中国文学を中心にする比較文学論としては、清水茂「語りの文学」(筑摩書房、一九八八)がある。
- (43) しかし、師匠ではなくテキストから伝誦を復原してゆく過程によって、後述する如く、本来フルコトには含まれていなかった要素(漢訳仏典など)が、「阿礼誦習本」に入りこんでしまう結果を生んだ。前提テキストがすべてオーラルなものではないと、先にことわったにはその意味がある。
- (44) 暦の伝来については、鎌田元一「暦と時間」(『列島の古代史―ひと・もの・こと7信仰と世界観』、岩波書店、二〇〇六)を参照。文字の伝来については、沖森卓也「漢字の受容と訓読」(『文字と古代日本5文字表現の獲得』、吉川弘文館、二〇〇六)を参照。
- (45) 承平度の講書を記したとされる『日本書紀私記丁本』には、次のような問答が記されている(国史大系第八巻『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』一八八―一八九頁)。
- 「師説。先師之説。以三古事記一為レ始。而今案。上宮太子所レ撰先代舊事本紀十巻。是可レ謂二史書之始一。何者。古事記者。誠雖三注載古語一。文例不レ似二史書一。即其序云。『上古之時。言意並朴。敷レ文構レ句。於レ字即難。已因レ訓述者。詞不レ達レ心。全以レ音連者。事趣更長。是以今或一句之中。交用二音訓一。或一事之内。全以レ訓録。即辭

理難見。以レ注明レ意。云々。」如レ此則所レ修之旨。非ニ全史意一。  
至三子上官太子之撰「纂ニ於年一纂ニ於月一。全得ニ史伝之例一。然則以ニ  
先代舊事本紀十卷一可レ謂ニ本朝史書之始一。」

この問答は『釈日本紀』巻第一、開題にも引用されるほど、後々まで注目されたものである。日本最古の史書を『先代旧事本紀』に求めることの可否はさておき、この問答は、『古事記』を史書の文脈でとらえないということが、既に承平講書以来、ずっと意識されてきたことを示すものである。なお、『日本書紀私記丁本』については、北川和秀『日本書紀私記』（『国史大系書目解題』下巻、吉川弘文館、二〇〇一）を参照。

(46) 『古事記』が後世どのようにに流布し受容されていったかについては、青木周平編『古事記受容史』（笠間書院、二〇〇三）を参照。また、斎藤英喜の一連の仕事も有益である（『古事記不思議な一三〇〇年史』新人物往来社、二〇一二・『古事記はいかに読まれてきたか（神話）の変貌』吉川弘文館、二〇一二）。

(47) 三浦佑之「古事記とその時代」（同編『古事記を読む』、九頁、吉川弘文館、二〇〇八）。三浦は、この疑問から「どう考えても、古事記「序」と日本書紀とに記された二つの歴史書編纂事業が、同時に行われたと考えるのは無理である」と結論づけ、『古事記』序文偽書説に突き進んでゆく。しかし、『日本書紀』の編纂史料として『古事記』を位置づけるのは、既に津田左右吉以来、説かれてきたところである。なによりも序文の内容を矛盾なく読解して初めて偽書かどうか論じられるはずなのに、それを置き去りにしたところで議論が進められてきたというのが、偽書説、序文偽書説の問題点だといえよう。

(48) 菅野雅雄「古事記成立の研究」（『菅野雅雄著作集』第3巻 古事記論叢3 成立、おうふう、二〇〇四、初出は一九八五）。藤井貞和前注（20）著書。  
(49) 瀬間正之「記紀の文字表現と漢訳仏典」第四章一「古事記の表記と『経律異相』」（おうふう、一九九四）。

(50) 志立正知「平家物語の成立」（川合康編『歴史と古典 平家物語を読む』、吉川弘文館、二〇〇九）。

(51) 渥美かをる「平家物語の基礎的研究」（三省堂、一九六二）。

(52) 前注（50）志立正知論文。原田敦史「平家物語の文学史」序章（東京大学出版会、二〇一三）。

(53) このように、『平家物語』諸本と平家語りの諸関係を考えることは、伝誦テキストとしての『古事記』を考察するうえで、重要なヒントを与えてくれる。たとえば、『平家物語』の成立圏論において、比叡山や高野山といった仏教の信仰圏が想定されていることは、『古事記』に漢訳仏典というフルコトとはおよそ異質なものが入りこんでくる契機を説明してくれるものかもしれない。かつて、河音能平は、『平曲』成立以前の琵琶法師・盲女たちが「地神経」を誦して門付け・竈払いをしつつ、同時にさまざまなジャンルの「物語」を語っていたさまを問題に採りあげ、その「物語」のレパートリーの中心に「天神縁起」を想定した（『日本院政期文化の歴史的位置』〔河音能平著作集2「天神信仰と中世初期の文化・思想」第八章、文理閣、二〇一〇〕）。彼らが語っていたジャンルは、①仏教説話、②世俗説話、③合戦譚、④物語（ロマンス）、⑤今様歌、⑥天神縁起、⑦各神社縁起などであるというが、仏教と世俗がせめぎ合うこのような場で、漢訳仏典を下敷きにした説話はもちろん、ヤマトタケルの英雄譚などまでが語られていたと考えるのは、想像にすぎるであろうか。今後の課題としたい。

(54) 前注（42）山下宏明著書。福田晃「中世語り物文芸論―その系譜と構造―」（『中世語り物文芸―その系譜と展開―』、三弥井書店、一九八一）

(55) この点に注意喚起を試みようとしたものとして、西宮一民「古事記の成立―偽書説批判および原古事記の比定」（『論集 古事記の成立』、大和書房、一九七七）があげられる。

(56) 小野田光雄校注、神道大系古典注釈編5「釈日本紀」巻第十三、三三三頁（神道大系編纂会、一九八六）。

（大阪府立福泉高等学校）